

## 太宰治批判

内 山 一 美

太宰に関する一般的な評価が先入観として深く私の中にあつた。何回かの自殺未遂者、敗北の文学とその文学を立証した彼の自殺——その系譜は逆説的な強さとしてさえずらない女々しい程の「弱い男」の印象を私に与えた。若い女性のように書き綴つていく彼の表現に魅力を感じたこともあつたが、あるあでやかなさを秘めたその魅力も彼の実生活のあでやかな弱さに圧倒されたか根をおろさなかつた。それ程彼の文学と彼の生活は一体をなしていた。反語と逆説と嘘に埋もれた彼の作品は、読者をごまかさな直さをその中にもつていた。そのような底抜けの正直さが私に安心を与えたために私は気安く太宰をえらんだのである。そうとしか考えられない。私は昔も今も、太宰のよくなる男性にささやかな同情以外のなものも感じないのだから——。

私はあまりに長くこの「弱い男」につきあいすぎたようだ。私は彼を越えなければならぬ。しかも早急に——。

一人の人間が自殺するという事件は、重大なことであるが、作品を通して社会と交流する芸術家の自殺事件は社会

的な幅を持つてなお一層重大な事柄である。だから太宰の生涯とその作品が彼の死によつて死の時点から逆登つて評価されがちであることはやむを得ない事柄であろうが、私は太宰に於る「死」の意味があまりに強調されすぎて、私のように思う。無論論理的帰結が「死」であつたということとは、その論理の中に一貫して死が流れていたものであるから太宰の「死」を過少評価してはならないが、太宰の自殺はあくまでも太宰の結末であつて、その結末から全てを逆展開して論ずるのでなく、一人の人間が成長展開していく過程を追いながら、太宰に於る悲劇を探ることの方が、私にはより人間的な様な気がする。歴史に「クレオパトラの鼻」を推量するのは愚劣であろう。しかし、太宰は必ず死ななければならなかつたと無条件に最初から決めてしまうのはあまりに太宰に不親切ではなからうか。何故なら、そのような決め方は、太宰が生きようとした努力を過少評価するであろうし、又は太宰の苦悩を「悲惨な光景」であつたとか、「勝利なき戦い」とかいう種類のオーバーな、私達の日常生活とは程遠い何か異質な苦悩として描き出しているから。私はまず太宰を私と無縁なものにしたくない。優れた作家が私達と異なると同じ程度にしか太宰も私達から離れていない。だから私は、何か苦しい事柄にぶつかつた時、やろうかやるまいかと私達が悩むように太宰も死ぬか死ぬまいかと悩んだことをまずふまえない。実際私達

できえ、死にたいと思つたことがないこともないのだから

。そして太宰は自分の背後に死の影を引いていたとはいへ死ななくてもその人が自らに誠実である限り「太宰」でなくなることはない。死んでも生きてても太宰らしかつた。

また一面自殺した事によつて神格化された太宰の伝説を私達の身近な側に引きおろして平凡に彼の映像を探らう。逆説家を論じるのに逆説をもつてせず、私達の日常平凡な願いと祈りを太宰の中に見出す努力をしてみよう。そしてなお太宰は異常であり、神格化さるべき人間であるならば彼は一体私と何の関係があるというのだ。

太宰が二十三年に園子と里子を抱いている一葉の写真がある。楽しい親と娘の風景。この可愛い娘を残して太宰は死んだ。娘の母を彼は裏切りつづけ、自分の肉体をも裏切り続けた。そこに一体どのような理由があつたというのか。私は彼の精神的苦悩の記録をどれだけ読んでも、それを合理化し、私を説得出来る何ものも発見出来ない。

私は「彼は、やはりまちがつているのではないか」という疑問を高く揚げたい。彼の純真な正直さと、自虐性が、全てを正当化したかに見え、誰しもそこに引きづり込まれるのであろうが、私の父がそのように生き死に、私の夫がそのように生き死ぬことをどのようなことがあつても許せないのだから、やはり私の平凡な立場をしつかりと守り続

けたいと思う。

健康であることを批評の土台とすることが、久しく軽蔑されていたようにも思う。しかし、未来に生きようと願う若い魂が「健康でありたい」という平凡な土台をもつて、批評の要とする<sup>かなめ</sup>ことは、当然な事柄ではないだろうか。

太宰について論じる前に私は「評論」ということをもつと考へたくなつた。批評し論評する為には批評する者の位置と主体がいる。

未来に生きる青年の健康さを私の位置にするからには、その内容を明かにしなければならぬ。

昭和三十七年代を二十一才に生きる青年の精神的な健康さとは何であるか。そして昭和初年から二十年代に青春をもつた「失われた青春」の健康さとは何を意味したのか。その時代の健康さと太宰の精神生活はどのような関係にあつたのか。――。

私は自分の精神生活が非常に主観的、主情的であることを知つている。鏡に向つて時間をかけて丹念に仕上げた自分の顔のある喜びをもつてみつめている時、ふと何か悪い思い出がよぎると、私は発作的に髪をばしゃばしゃにしてしまつたりする。しかも、そのようなことをしても別に自分はヒステリー患者ではないし、誰かが窓の外から自分を突然呼んでも「なに」と笑いながら答えることが出来るのだと自分の理性を失わずに髪をばしゃばしゃにするのであ

ないのだから、やはり私の平凡な立場をしつかりと守り続

る。そのような仕草は若い時よくある、ある性的なものまで含めたいらだたしさなのだ、物分りのよい連中は判断するのだが、そのような人達は決して理性的なものとは主情的なものとの矛盾にみちた精神生活を体験することのない人達であろう。

愛することの中にも憎しみを覚えなければならぬ近代人の二面性、そのように矛盾に満ちて、とぎすまされては屈折する近代人の精神は、健康であるという批評の位置を非常に不安定なものにする。では一体、動揺し、矛盾を感じないことを健康であるというのか。

とすれば太宰のように転々とするものは自分がひらき直つて「失格」と主張するまでもなく「失格」を主張出来る主体をも持ち得ない程の不健康、腐り切つた墮落者といわなければならぬ。

武者小路の精神生活は俗にいわれるように健康であつたか。なる程、彼は動揺していないし、矛盾すらも感じないように見える。だが彼の天才的な人間の信頼感はどうも「馬鹿一」じみて、白痴に矛盾がないように武者小路には動揺がなかつたなどと変な皮肉を口にしたくなるような健康さであるようだ。

いつたい、この文明と野蛮と、平和と殺りくと、搾取と抵抗とのすさまじいばかりの時代に、何等の内的動揺も、矛盾も感じることのない人を健康と言うことが出来るであらう。

と自分の理性を失わずに髪をほし、

うか。そうではない。若い感受性は一枚の新聞の中に無数の矛盾を発見する。そしてその矛盾は自分の生活のありようは、一体これでいいのかと私に迫る。これでいいという私の願望、いやそうではないというあのひきずり込むように私に呼びかけてくる。「正義」とやらの息吹き……。しかも私はその苦悩を、動揺しているが故に不健康であるなどとは少しも思わない。

私にとつて健康とは明らかである。苦悩を真正面から苦悩としてとらえ、これを克服する為に、回避する事なく、決して死んだりして回避することなく闘うことである。健康とはそのようなものではなからうか。そして「美」とはそのような闘いの事ではなからうか。「未来に連なる健康さ」とは、未来に必らず勝利し、心ゆくまで喜び笑う者の持つ精神の内容ではなからうか。

不幸な時代に生きた太宰は不幸であつたが、なによりも太宰が不幸であつたのは、生きて闘うことを美しいことであると理解出来なかつたことである。

文芸評論家にとつて太宰ほど論じやすい作家はあるまい。太宰の特徴と思われるものはあまりに明白であるから。何回も何回も同じような調子でほめられては、最後にちよつびりけなされて、評論家から非常に甘やかされている太宰の特徴を、私も綴り上げなければならぬ。

太宰評論の土台は竜井勝一郎氏、福田恒存氏、奥野鏗男

氏、佐古純一郎氏らの活躍によつて既に固まつたかに思える。批評眼に乏しい私は、諸氏の論文を読むとその卓見に圧倒されて、彼らが引いた軌跡から一步も踏み出せない醜態を今、さらしている。それらの論文の書き写しではあまりに才がない。太宰を読後感想では、おそらく論文の体裁さえ整わないに違いない。しかし、出来る事といえはまずとぎれとぎれの読後感を、とぎれたままに書き記すことであるようだ。それを体系づけるのは次の段階である。

一、太宰の「純粹」について

『汲み取り便所は如何に改善すべきか?』といふ書物を買つて来て本気に研究したこともあつた。

自分の精神生活の悲惨さを述べる為に、さりげなく自分を卑下して、読者の痛みまでの同情を期待した一行である。ヴェルレエヌの「撰ばれてあることの恍惚と不安と二つ我にあり」という詩をこの小説の巻頭に掲げる程自意識の強い作者が、下品とされる内容を真つ向に振りかざした姿は、ユーモアというよりもむしろ読者への計算されたポーズがあるように思える。

「お手洗ひ改善」というような薄いパンフレットを、「汲み取り」といふ書物を——研究——あつた」といふ位の操作を彼はいつもやつたのではないか。一種の誇張を通してそれをシニカルなユーモアに仕立て、その誇張された皮肉な世界があたかも太宰そのものの世界であるかのような

錯覚を彼は読者に与えさせたのではないか。(私がこのように皮肉に太宰を眺めるのは、文才があるにしても、作家と言われるが故に私達と隔たつた異常な精神生活を送るなどとは考えられないからである。私は太宰を神格化しているヴェールをはぎとつて、私達と同列に彼を据えたいのである) そればかりではない。そのような書物を買つて研究したその時、このことを作品化しようと念頭に置いて、改めてその本を読んでいつたのではないか。

同じ作品の「思い出」のところに次の一節がある。

うしろで誰か見てゐるやうな気がして私はいつても何かの態度をつくつてゐたのである。私のいのちのこまかい仕草にも彼は当惑して掌を眺めた。彼は耳の裏を掻きながら呟いた。などと傍から傍から説明句をつけてゐたのであるから、私にとつて、ふと、とか、われしらず、とかいふ動作はあり得なかつたのである。このようにはりつめた精神は太宰特有のものではない。

それは個を探り、自我を見つめる近代人の精神生活である。自分の行動、自分の感情をはつきりつかんで走り、泣くことは作家の必要条件でもある。

「何かの態度をつくつて」いるのはポーズである。「傍から傍から説明をつけていく」のはどのような時にも自分をみつめることの出来る自意識である。その自意識は「汲み取り」を「本気に研究」するもう一步奥の意識であ

る。奥の意識と「研究する」までの間隔、「研究する」から「本気に——」をつけ加えるまでのもう一つの間隔をそれらの間隔を縫つて、太宰の気弱な、しかも読者に甘えたポーズが表れたと私は思う。

彼には数回の自殺未遂の経験があり、失恋と非合法活動の経験もあつた。なによりも、自分自身の肉体と実生活から聞いた思念であるという自己のデカダンに対する自信があつた。また他方、

ダンテ・ボオドレル——私。その線がふとい鋼鉄の直線のやうに思はれた。その他は誰もいない。

という種類のうぬぼれがあつた。

自殺という存在否定の行為を繰り返し乍らも、自分に対する自信は弱虫は強い奴に負けて泣いても当然ではないか、というような逆説的な論理をくりひろげたようである。見苦しくつつこかされた男が何となく笑つた。それがポーズであり道化ではないのだろうか。そして「お手洗改善」を「汲み取り便所は——」という種類の道化を売り物にしたのではないか。

ミイラとりはやがてミイラになつてしまつた。平野謙は名著「新生論」の中で、

なせ藤村は『新生』を書いたか。答は一見明瞭である自己表白による自己救済と。あらゆる『新生論』がその線に沿つて書かれ、芸術的価値以上の宗教的価値までがそ

こに発見された。しかし、まことこの答案に誤りはないか。

と問題を提起し、藤村が姪との不倫な関係をどのようにな人間的に処理したかを。

その犠牲の上に書かれた『新生』発想の奇怪さを断罪したが、私は太宰にも断罪すべきいくつかの内容があるのではないかと思う。

彼のいわゆる「純粹」なるものがそれである。

僕は何故小説を書くのだろう。新進作家としての栄光がほしいのか。もしくは金がほしいのか。芝居気を抜きにして答えろ、どつちもほしいと、ほしくてならぬと、ああ僕はまだしらじらしい嘘を吐いている。このような嘘には、人はうかりひつかかる。嘘のうちでも卑劣な嘘だ。僕は何故小説をかくのだろう。困つたことを言いだしたものだ。仕方がない。思わせぶりみたいではあるが、仮に一言こたえて置こう。「復讐。」

この一文は「復讐」という言葉で止まつているが、太宰の作品の中で到る所に表れる、どこまでもどこまでも自分の心情を表白していく内面告白を、人は彼の純粹のあらわれであるという。だが、見落してならないことは、そのような内省の奥にやはり作家としての太宰が冷たい顔をしてつたつたっているという事である。彼は「津軽」の中で、自分が御飯の為に兄や兄の家族のことを筆にすることを苦

しむと書いてある。しかも、彼は、苦しむ自分と自分をとりまく兄と兄の家族の種類の事を真正直に告白したのである。しかもその時読者は、太宰は「純粹」に告白しているという事に酔つたとしても、太宰の「痛み」を理解出来なかつたに違いない。純粹とか正義とかいうものが行為を伴わず、人々の心情でのみ理解される時、それは非常に空疎なものになる。あんなにも太宰と読者の間にあつた共感が空疎な純粹という単なる讃辭に終つた時、太宰は人間の世界には「私」以外に純粹なものはないと誤解したに違いない。

ミイラとりはまさしくミイラになつた。

純粹を守る為には純粹を破壊するものに闘わなければならない。太宰の致命的失敗は読者によりかかつた甘えで、自らを作品の上であまりに「道化」させたということ、「道化」の証しとして実生活を「道化」たということにまずある。そして、純粹を守る為の闘いは俗世間に対するものであるならば、俗世間に外向的に立向かわなければならなかつたのに、それを放棄し、自閉的自虐的になつたことにある。その自虐的になつた姿が又「道化」であつたとするならば、太宰の悲劇は宿業的なまでに彼の中に根をおろしていたことになる。「道化」の結末を知つた太宰は読者と自分のくい違いをなげかざるを得なかつた。

僕が早熟を装つて見せたら、人々は僕を早熟だと噂し

た。僕が、なまけもののふりをして見せたら、人々は僕をなまけものだと言つた。↓僕が小説を書けないふりをしてたら人々は僕を、書けないのだと言つた。僕が嘘つきのふりをしてたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしてたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。

僕が冷淡を装つて見せたら人々は僕を冷淡なやつだと噂した。けれども僕が本当に苦しくて、思はず呻いた時人々は僕を、苦しい振りを装つてゐると噂した。どうもくひちがふ。

太宰治の作品と生活を、ポーズだと言つて批判し、後に太宰からしつこくつかかられたのは志賀直哉である。

あの作者のポーズが気になるな。ちょっととほけたよ。うな。あの人より若い人にはそれ程気にならないかもしれないけど、こっちは年上だからね。もう少し真面目にやつたらよからうという気がするね。あのポーズは何か弱さというか、弱気からくる照れ隠しのポーズだからね。

これに対して太宰はよく知られているように、「如是我聞」(昭和二三年三月)で志賀にかみついた。その論争を整理するのが目的でないからはずだが、「自己肯定」老大家から、君の自己否定はポーズだ、といわれてむきになつた太宰は、実にいやらしい程の悪口をそこで吐き出している。

「如是我聞」では冒頭「志賀直哉というのが」とあり「こ

の男」「かういふ作家」「この者」ということになる。「あいつの書くものなどは詰将棋である」「旦那芸の典型」「薄化粧したスポーツマン。弱い者いじめ。エゴイスト。……」——「如是我聞」は『新潮』の二三年の三月号から連載され、六月一三日に死んでから七月号に最終回が発表された。そこは追いつめられた男の最後のあがきというか悲鳴というかそういう切迫したものがみちみちて、もはやポーズなどは感じられない。

私は志賀も指摘したように太宰には明かに「ポーズ」があつたと思う。そのポーズが「如是我聞」ではげおちたのは、志賀という老大家の中に、自分の主体と激しくぶつかる何かを感じ、それに必死の抗弁を行つたことにあると思う。「敵」はあまりに明確であつたし、その「敵」をうちたおす為にはペンをとる以外になかつた。闘いが内向的自虐性から外に向つた時、「道化」と「ポーズ」ははげおちた。太宰は死に近づくこの一瞬に起死回生の絶好のチャンスを迎えたのではなかつたか。それをつかみ得なかつた精神的弱点は彼独特のあの「甘え」にあつた。

太宰は反論の中で、『シンガポール陥落』『小僧の神様』『兎』『暗夜行路』などをつぎつぎに挙げ、その「自己肯定のすさまじさ」を暴露する。太宰が「如是我聞」で志賀に食いついた言葉には支離滅裂な所がないでもないが、要するに「志賀文学は社会的、人間的に恵まれた環境の中に生

育して来た一本調子の作品であつて、おそろしく強く自信を持つた骨格があり、芸術家の弱さとは無縁であり、人間の弱さを軽蔑している」といつているが、この指摘はよく當つていると思われる。

武者小路にしても、志賀にしても、上層階級出身の楽天性は貧しき者、弱き者に対して同情は示すが、貧しき者と共に闘うという課題を自らに提起しない。そこには貧しき者への鈍感ともいへべき残酷な神経が横たわつている。それが弱い太宰の神経にかちんときたのであろう。

志賀が太宰のポーズを批判する場合も、その基盤になつているのは「貴婦人が庭で小便するのなんぞも厭だつた。作者がそのことに興味をもつ事が厭なのかもしれない」と前掲の座談会でのべているが、このように志賀自身の貴族性もしくは貴族的楽天性がその根底になつているのである。

津軽の素封家の息子が明治の貴族に軽くあしらわれたこともカツンときたであろう。

だから太宰は貴族作家志賀に対して弱き者の名に於て抗議したのではあつたが、志賀の「自己肯定」に対して「自己否定」を通らなければ作家及び人間としての資格がないというキリスト教的立場に骨の髄まで虫ばまれていた所に太宰の「弱さ」と「甘さ」と「道化」があつた。自己を肯定する者、それは支配層だけではない。被支配層の中にも

自己の将来を確信し、自らの生命と生活に限りない誇りを抱いていた人達がいたのではないだろうか。非合法活動を経験した太宰はその事をよく知っていたはずである。

「シンガポール陥落」を取りあげて、志賀の思索の粗雑、無教養、軍人精神みたいなものに満たされたファッショ的精神構造だと暴露した太宰が、戦争下に於る宮本百合子、中野重治等の戦いを知らなかつたはずはないのだから。

志賀は確かに人間の弱さに無神経であつたかもしれない。しかし貧しき群の中から生れた作家達は人間の弱さを理解しながら、なお人間と人間の未来を肯定したのではなかつたらうか。そしてそのように人間を肯定する一群は太宰の弱さとそこから生れる「道化」と「ポーズ」を理解しながらも、太宰を「甘い」と評価しはしないだろうか。

その「甘え」こそ起死回生のチャンスを見逃したのだと私は先に述べたが、それは太宰、志賀論争の中にもよく現れている。

太宰は志賀を敵として攻撃しながら次のような事を言つて自己紹介している。

その嫌らしい、その四十才の作家が、誇張でなしに、血を吐きながらでも、本統の小説を書くこうと努め、その努力が却つてみなに嫌はれ、三人の虚弱の幼児をかかえ

——おかずの買物にでるのである。

小田切秀雄は

ひとたび攻撃に立ち上がったのなら敵に甘えたり感傷的になつたりする代りに、もしどうしても骨まで切りこめなかつたらせめてカスリ傷一つでも負わせてくるのであれば戦いにはならぬ。太宰のスタイル、感受性や思考方法が既に自己の敵とする者に対して正面切つた戦いを行うに堪えぬものとなつていたことは考えられねばならぬにしても、それでもひとたび戦いに立ち上がったら相手に痛痒を感じさせないような戦いぶりでは話にならぬ。と述べている。

全ての戦いは勝つことをもつて完うする。

その戦いの場所で自らの弱さを告白することは弱虫の偽正直である。又太宰は志賀に対する戦闘宣言の中で、自分がこのような愚笨をあえてするのは何も『個人』を攻撃するためではなく、志賀の中にある反キリスト的なものに闘いを挑むのであると述べている。

志賀というリアリズムの老大家と戦う以上、それはその人の思想と生活を含めて『個人』もしくはそのような『個人の集団』グループ階層etc』であるはずなのに、それを「反キリスト的なもの」という抽象化した次元へ、一応ひっこめなければ戦いの宣告を発しきらない所に、思想上の本質的な甘さがあるのでないか。

愛についてもだえ悩み、生きることを疑い悩むことが弱さの証ではない。例え悪口と支離滅裂な文章であり、挑戦

の内容が貧弱であれ、そのこと自体が弱さの証明ではない。ただ太宰は、彼が一生一度の具体的な戦いの場に於て「甘さ」を表明した。それが太宰の致命的弱点となつたと言うことである。そして太宰の弱さはさらに拡大再生される。彼は「文学者ならば弱くなれ」と悲鳴のように叫ぶのだ。弱者の中に秘められた強き者への抵抗がいろんな形で存在し、わき出るからこそ弱さは美德にもなり得るのであつて、次の一節のような限らない弱さ、無抵抗の弱さは太宰の人間観にとつて致命的な意味を与える。「太宰特有の弱さ」である。

自分にはもともと所有欲というものは薄く、自分の内縁の妻の犯されるのを黙つて見てゐた事さへあつたほどなのです。

ミイラとりがミイラになつた。この姿はあまりに腐れ切つて次に何かを論じようという意欲さえ失わせる。

(長文のため、一章のみ抄出、又注は都合により省かせていただきました。編集部)

## 源氏物語に於ける

### 漢詩文引用と白氏文集

古 沢 未知男

源氏物語の研究には勿論種々各般の分野がある。が漢詩文引用の面からなされる事も亦私は確かに必要であると思つて居る。そして此の観点から従来さ々やかながら一聯の研究を進めて来た。

私に於てそれは結局 1、詞句出典や引用傾向の問題、2、引用の様式や技法、独創の問題、3、及びそれ等に繋がる源語の性格や構想の問題等を目標としたものであつた。

所で先年偶々同じ此等の問題に關聯して今井源衛氏の御意見があつた。(慶応義塾大学国文研究会編、国文学論叢第三輯、平安文学、研究と資料——源氏物語を中心に——「源氏物語における漢詩文の位置」)

思ふに氏の論説は着想と見識其の他多くの点に於て肯綮に当り示唆に富むものであり、啓示を受ける事甚だ大である。が一面また見を異にする所もないではない。茲に主として氏の論を中心に少しく卑見を述べて見たい。

一、